

半径 5 メートルから

D' Overbroeck' s College 2年 近藤 理紗

昨年 9 月 20 日 金曜日 12 時 20 分。私はジョージ通りでバスを降りた。あちらこちら「気候の変動に対していま行動を」という声がする。私は学校の昼休みと 4 時間目の外出許可をもらいオックスフォードの「クライメート・チェンジ・プロテスト」に参加した。これは、グレタ・トゥーンベリさんの活動にもとづく金曜日に行うデモで、気候変動に対する具体的な政策を行政に求めるものだ。

私は父の仕事で 3 年前に英国に来た。英国の夏は涼しいと聞いていたがそれはウソだった。一昨年は 42 年ぶりの熱波を、昨年は史上 2 番目の猛暑を体験した。英国では公共交通機関、公共施設、一般家庭に冷房はない。このまま地球温暖化が進めば、真夏の首都は機能しなくなると思い、デモに参加した。

デモには複数の環境保護団体が参加していた。私が驚いたのは一般参加者の多さだ。お年寄りから親子連れの小生まで、世代も国籍もさまざまだった。それは、今年 11 月にグラスゴーで COP26 (第 26 回気候変動枠組条約締約国会議) が開催予定であったことが大きい。英国は脱炭素化に動き始めたことでより注目を集めていた。もう一つ感じたことは、人種に関係なく参加できたうれしさだ。そして、この金曜日に、世界各地で同じようなデモがあるのだと思うと、まるで自分が世界とつながっている気持ちになった。

それから半年後の今年 3 月 25 日。コロナウィルスの流行により都市封鎖が始まった。生活が一変した反面、ロンドンでは青空が増えた。英国リーズ大学のフォスター教授父娘の研究によれば、二酸化炭素や窒素酸化物の排出は、4 月 1 日の時点で、昨年よりも 1 割から 3 割減少したようだ。しかし、今回のような世界規模での人間活動の縮小を毎年行い続ける限り、2050 年には地球の平均気温は 1.5 度以上あがる見込みだ。実際の体感温度は 1.5 度の倍以上だそうだ。

都市封鎖のような状況を世界中で毎年行い続けることは不可能だろう。かといって何もしなければ、体温よりも高い夏を過ごすことになるのは私たちだ。だから、猛暑や局地的な豪雨、台風の大型化といった気候変動は、勝手な現象ではなくて、全て人間の経済活動の反映だということを、30 年後も 50 年後も地球で生きる若い世代こそ認識するべきだ。さらにいうのならば、経済活動の主要な担い手でない私たち中高生だからこそ、経済よりも環境を優先させる行動を、何か 1 つでも始めるべきだ。自宅待機ができたなら、前とはちがう行動や消費パターンも築けるはずだ。

私はこの 9 月から 3 つの行動をおこす。1 つ目は、学校の給食の改善だ。宗教上の理由が無くてもベジタリアンランチを選べるようにしたい。多くの人が菜食を導入することは家畜の飼育のエネルギー消費をおさえ、地球温暖化の対策に有効だ。2 つ目は、気候変動で特にきびしい状況にある人への間接的な支援だ。巨大台風や洪水によって被害を受けた貧しい人々へ支援活動を行っている、オックスファムという団体がある。私は今年 1 月からそこでボランティアを始めた。都市封鎖で中断したので、9 月からの学校再開と共に、ボランティアも再開したい。3 つ目は、必要な物しか持たない生活だ。私は安くて可愛いパーカーが大好きで、お店で見かけては買っていた。数えたら 12 着もあった。しかし全部は着ていない。原料の綿花の栽培には大量の水を消費することからも、このような自分が満足するためのだけの買い物はもう辞めたい。

英国では今もデモ活動は禁止だ。各個人が自分の場所で行動をおこす時なのだ。自分の場所、それこそ、「自分の半径 5 メートル」の世界から、小さくてもよいから行動パターンを変えていくべきだ。私が、学校の食堂でベジタリアンランチを選ぶとき、あの時一緒に行進した名前も国籍も知らない人たちと、心でつながっているのかもしれない。